

論文の要旨

論文題目 留学体験による日本認識の形成 中国人のための日本語教育における文化理解教育の手がかりを探る
氏名 孫 長虹 (Sun, Chang-hong)
学位 博士 (文学)
授与年月日 平成 16 年 3 月 25 日

異なる文化に接する時、カルチャー・ショックに遭遇した際において、予備知識と文化理解の態度が必要であると思われる。その場合、「文化の違いを見る目の違い」という文化相対主義の異文化認識態度の養成が不可欠である。自分たちの文化の価値基準で異なる文化を判断し、自分たちの文化との差異を認めないという頑なな姿勢は、異文化に対する感受性と共感を妨げる要因である。そのため、オープン、寛容、柔軟な認識姿勢が、異文化体験成功の鍵であると言えよう。

これまで、「対人関係」が留学生の一番の適応の障害となっていることは明らかになっている。

しかし、中国人留学生を対象とした先行研究は、概ね在日中国人留学生の日本・日本人に対する全体像としての研究であり、中国人留学生の一番の不適応である「対人関係」に焦点を当てた研究はほとんどない。「対人関係」の問題は、留学に大きな影響を与える要素として意識されているが、しかし個人体験をもととした生活史的記述はあるものの、原因分析、対策に至るまでの研究はまだ不十分であると言える。

中国人留学生は日本における「対人関係」において、どのような困惑を抱えているのか、またどのように認識しているのか。また、それを明らかにした上での予防策としての予備知識の習得は大切であると考えられる。

したがって、本論ではミクロな視点から、中国人留学生が困惑を感じている「対人関係」に焦点を当て、それによって来る原因を追求し、そしてその解決策を探るための研究を試みたい。

第 1 章では、近代から現代にかけての中国人の日本観の変遷をまとめ、中国人の日本認識を明らかにする。日清戦争から現代に至るまでの中国人の日本観を明らかにすることによって、中国人の日本観の全体像を明らかにした。それによって、今日の中国人日本観の形成要因の手がかりをさぐる。現代中国人は、日本人 に対するイメージが 日本国 よりプラスにあって、これは人的交流が盛んになった今日の特徴である。このことから、人

的交流が大きな役割を果たしていると言える。同時に、日本人の中国観を明らかにし、比較対照することによって、日中間の交流のギャップはどこにあるのかを探った。

第2章では、二十世紀初頭の第一次日本留学ブームの留学生、魯迅・周作人・陶晶孫の日本観を取り上げた。

魯迅は、日本人の中国人に対する蔑視と自国人の無頓着な振る舞いを見、この体験によって、自国の国民性の劣悪性を認識し、自省を経ての人間の確立を中国人に呼びかけた。

周作人は日本文化の中にある中国の古き良きものに親しみを感じると同時に、中国人の自惚れによる不精確な異文化認識を批判した。そして、日本文化を深く理解するためには、日常生活から入り、表面的なものではなく、その深層に隠されているものを理解すべきであると述べた。

陶晶孫は、一番感受性豊かな少年時代、青年時代を日本で過ごした。彼の日本からの影響は大変大きかった。彼は日本を愛すると同時に、中国に対し深い愛国心を持っている。また彼は日本の理不尽なところを批判し、日本を理解する時に、好きと善悪とを混同してはいけないと述べ、人類の普遍的価値に基づく真の日中友好をはかるため、日本の西欧一辺倒の姿勢に警鐘を鳴らした。

三人とも日本での留学を通して、日本に対し愛情を持ち、そして心の通いあう日本の友人を持っている。日本での体験はそれぞれ違うものを持っているが、日本文化の中の良いものを見つけ出し、中国・中国人の欠けているものを認識し、日本から学ぶべきもの、そして批判すべきものを提示した。二十世紀初頭とは社会的背景が違うものの、魯迅・周作人・陶晶孫の日本認識の仕方は、今日においても、学ぶべきものが大いにある。

第3章では、現代中国の若い世代の四つの“グループ” 中国国内の若い知識層・日本語を学ぶ大学生・在日中国人留学生・帰国留学生の日本観を明らかにした。それぞれのグループでどのような共通点と相違点があるのか、どのように形成されたのか。また、異文化体験としての留学は、日本観の形成にどのような影響を与えたのか、中国人の日本観はどのような変化があるのか、を分析・考察した。

出国前において、一般の中国青年の日本観は、主にメディアや教育から受けてきたステレオタイプ中心のものである。次に、日本留学のための日本語学習を通して、さらに日本人とのかかわりあいによって、直接的情報より以前に形成された日本観は少しプラス方向に修正される。そして、日本での留学を通して、異文化を身を持って体験し、かなり直接的なイメージを形成する。留学を終え、もう一度日本を見る時、より客観的な見方を持つことができると考えられる。

しかし、留学という異文化に対する認識形成の重要な手段から生まれる結果は、必ずしもプラスのものであるとは言えなかった。

留学生が日本で経験する最も愉快・不愉快な出来事は、どちらも日本人との人間関係に関わるものである。

中国人留学生の日本・日本人に対するプラス、マイナスのイメージは、日本人との人間関係によって左右され、それが日本・日本人に対する評価の重要な決定因になる。中国人留学生の日本での対人関係の問題は、日本観の形成の最も重要なポイントである。しかし、それは問題として意識されているが、そのメカニズムについてあまり研究されていない。したがって、第3章で明らかになった中国人の日本認識の問題点に基づき、さらに第4章のアンケート調査の分析を通して、今まで究明されなかった中国人の日本観形成のメカニズムを明らかにし、よりよい理解をはかるための方策を探ることにする。

第4章では、中国人国費留学生の日本観に焦点をあてる。国費留学生の帰国率が高い上、帰国後ほとんどの人が中国の大学や研究所に勤めていて活躍し、学術面だけでなく、大学の重要なポストにつく人が少なくない。彼らの自分の日本留学を通しての日本観は、後輩にあたる中国の若者の日本観に少なからず影響を与えることが想像できる。

そこで、国費留学生を対象に、 出国前・留学中・帰国後 にわけて、日本認識に関するアンケート調査を実施した。

出国前 の国費留学生の日本観は、主に間接的な情報によって形成されている。中国国内における日本語学習を通して、日本人の先生との付き合いによって、日本に対するイメージは少し具体的になり、日本人に対し、親しみを持つようになる人が多くなる。また、日本人との直接的なかわりを通して、それまでの日本・日本人像が少し修正され、プラスの方向に動いた。

一方、新しい環境に身を置く前の不安もうかがわれる。特に、生活の場としての日本の文化の特徴、日本人の思考様式、日本人との付き合い方などに対して、彼らは事前の知識の必要性を感じている。

留学中 の国費留学生の日本観は、さらに具体的になり、周りの日本人とのかかわりを通して、日本・日本人に親しみを持つ人は、三分の二になる。親しみをあまり持たない人でも、日本人の親切、勤勉、礼儀正しさなどといった日本人の良さに感心し、彼らの日本観のプラスのイメージにつながる。しかし、親しみを持っている人でも、親しみを持たない人と同様、周りの日本人とのかかわりの中、日本人との対人関係において、戸惑いを感じる人が多いようである。日本人との対人関係が、彼らの日本観を左右する重要な要素になると思われる。

また、日本での実体験によって、コミュニケーションの手段である言語の重要性を感じるほか、日本文化、つまり日々日本人との付き合いの中で、日本人の思考様式、行動様式に関する知識を、前もって備えておく必要の重要性を感じている。留学生活の中で戸惑いを感じるのは、主に対人関係に関するものである。

帰国後 の日本観は、概ねプラス評価であると言える。留学を通して、半分以上の人が、

日本に親しみを持つようになり、反日の感情になる人はほとんどおらず、日本留学に良い評価を下している。そして、彼らの日本観は、主に日本人とのつきあいを通して形成されたものであると言える。

したがって、留学生の日本観を決定するものは、主に日本人との人間関係によって、決定されると言えよう。

間接情報による中国人の日本・日本人認識は、一つの型にかたよっている。日本人とのかかわりによって、「どの国にも良い人と悪い人がいるので、区別して判断すべきである」と、考えるようになった人が多く見られる。したがって、事前に必要かつ客観的な知識を与えることによって、積極的な他人への関心、さらに他人への感情移入という異文化理解の態度を養うことが重要であることが分かる。

態度の形成要因において、最も基本的なものは、態度対象への直接経験である。

中国国内において、教育やマスメディアの影響によって、留学生達は固定的なステレオタイプの日本認識を形成している。そして、日本語学習を通して、日本人との接触によって、日本・日本人観は一部変容するものの、固定したイメージはまだ根強く残っている。態度の変容、新しい態度の形成に、最も一般的な方法として、説得的コミュニケーションが有効である。そのため留学生が異文化環境に適応するため、出国前のオリエンテーションにおいては、問題としてある日本文化に関する内容の教授、説得的コミュニケーションのメッセージとなる教材の開発が必要となってくると考える。

第5章では、第3章と第4章をふまえて、日本文化理解のための教材開発を試みる。留学生の日本に対する思いを良くするも悪くするも、対人関係が深く影響していることが明らかになった。

今までの研究は、主に 受け入れ側 の研究が行なわれてきた。しかし、 体験者側 からの観点に基づくアプローチは、ほとんど行なわれていない。異文化適応は、一方からの働きかけだけではうまくいかない場合が多い。留学を体験する者、 体験者側 からの働きかけがないと、異文化適応はなかなか進まないからである。したがって、 体験者側 の積極的な適応姿勢が重要であると言える。

オリエンテーションは、新しい環境への適応を助ける過程である。そして、出国前のオリエンテーション 文化理解教育は、異文化適応に重要な役割を果たすことができると言える。

第4章における 出国前 の中国人国費留学生を対象に行なったアンケート調査において、半数以上の人々が、日本の生活様式、思考様式、日本人との付き合い方に対して、前もって知っておきたいと答えている。

「対人関係」の中で、中国人留学生は具体的に何に対して障害を感じて、そしてそれをどのように受け止めているのか。それを明らかにすることによって、出国前の中国人留学生への日本文化教育に応用できれば、カルチャー・ショックの軽減につながることができ

ると予想でき、また摩擦を避けることも可能であると考えられる。

そこで、中国人留学生が感じる異文化環境における悩み・困惑をまとめ、それを軽減するための手助けとしての日本文化理解のための教材素材を提示した。

それと同時に、本当の異文化理解は自分の文化を捨てるのではなく、相手の文化と同化してしまうのでもない。異なるコミュニケーションスタイルに遭遇した時、柔軟な態度で接することが一番大切である。このような態度の育成も文化教育の重要な作業でもあると考えた。

終章では、本論を踏まえての今後の課題を考えた。今後の課題として、調査対象に対する縦断的な追跡調査を行い、出国前・留学中・帰国後の日本認識の特徴と変化を明らかにし、より効果的な文化理解教育をはかりたい。